立命館人間科学研究，23，59–74，2011.

展望論文（Reviews）

現代社会における若者の現実逃避的行動についての一考察

――「自分探し」の延長線上のプロアスリート――

石　原　豊　一

（立命館大学大学院国際関係研究科）

One Consideration about Escapism Action of Young People in Contemporary Society：Professional Sports on the Elongation of “Self-seeking”

ISHIHARA Toyokazu

（Graduate School of International Relations, Ritsumeikan University）

The prospects about the situation surrounding young people in Japan do not seem to be brightened in the recession after collapse of the Bubble Economy and deterioration of employment environment. In such a change of social circumstances surrounding developed countries, substantial changes begin to appear in sport world. Especially the youth is transforming their approaches to work. Some of them escape from their social duty as adults. “prasite single”, “back packer”, “freeter” and “social withdrawal” are becoming main topics surrounding young people in Japan these days. And new shelters like graduated school or international NGO activities, which look smart at a glance if they do not have full time job, are found. This article presents that professional sport is regarded as one of such shelter.

Key Words : sport labor migration, “self-seeking type” athlete, escape reaction, globalization of sport
キーワード：スポーツ労働移民，「自分探し型」アスリート，逃避行動，スポーツのグローバル化

はじめに

「失われた10年」と言われたバブル崩壊後の不況と若者の雇用をめぐる環境の悪化は，その恩恵を受けた実感のないまま通り過ぎた「平成景気」後，そのまま継続し，今や「失われた20年」とも言われるようになっている。この中で，先進国の若者を取り巻く状況は，いまだその展望が開けていない（玄田, 2005；中野, 2007；森岡, 2009）。低賃金不安定雇用にさらされる若者の「希望は，戦争」（赤木, 2007）という主張を受けて起こった新自由主義経済の行き過ぎへの非難，あるいは逆に若者の労働に対する認識の甘さを指摘する議論（佐高・奥原・若松・福島・森・鎌田・斎藤, 2007）は，その結論を出せずに終わり，社会に蔓延するある種の息苦しさは日本社会を取り巻いたままである。その一方で，昨今，「希望」,「夢」という言葉が氾濫し,「希望学」（玄田, 2006）なる言葉さえ出現している。

そのような社会状況の変化の中，産業化の進展とともに出現したプロスポーツの世界にも大きな変化が現れている。スポーツの技能により生活の糧を得るアスリートの出現は，近代社会

のもたらした現象のひとつであるが，スポーツのグローバルな拡大はその技能を携えて国境を超えるアスリートの増加という現象を生んだ。彼らの移動理由は，本質的には経済的要因に求められてきたが（Maguire & Stead, 1998），プロスポーツがその規模を拡大するにつれて，富を求めた先進国へのプロアスリートの流れは促進され，途上国は選手供給地としての役割を担うようになった（Klein, 1989；Bale, 2004）。

グローバル化の進展の中，プロアスリートの枠組みは変容を遂げている。スポーツ労働移民の移動要因が経済的なものだけにとどまらないことはすでに指摘されているが（Maguire & Pearton, 2000；Magee & Sugden, 2002），その射程に置かれていたのは「世界漫遊者」（Falcous & Maguire, 2005），「セレブリティ・スーパースター」（Agergaard, 2008）などと表現されるすでに巨万の富を築いたトップアスリートであった。しかし，プロスポーツにおけるグローバルなネットワークの構築はスポーツ労働移民の枠組みの変容を生んでいる。

例えば野球においては，北米トップリーグであるメジャーリーグ・ベースボール（MLB）による地球規模での資本，選手の移動フローのネットワークである「ベースボール・レジーム」が形成され（石原, 2010a），その周縁において「労働力貯水池」が拡大していることは，野球新興国でのプロリーグの勃興（石原, 2008）や，すでにプロリーグの存在していた北米や日本における独立リーグの発足（石原, 2010b）に見ることができる。

このような地球規模でのトッププロリーグによる選手獲得網の拡大と，人材供給地としての事実上のファームリーグの増加は，その底辺において競技レベル低下を生んだ。例えば野球新興国イスラエルに発足したプロリーグの観察からは，移動理由として経済的要因が非常に薄く，プロ選手になるという自己実現が主要因と考えられるスポーツ労働移民の事例が発見された（石原, 2010c）。

近代資本主義社会が行き着いた「格差社会」の中，今多くの若者が社会の中心からこぼれ落ちていきつつある（山田, 2007a, 2007b, 2007c；小杉, 2002）。彼らは将来に展望が持てず，だからこそ実現の可能性が低い学卒から正規雇用，そして結婚，次世代の生産，育成というレールに乗ろうとしないとも考えられる（熊沢, 2006）。

しかし一見将来に展望を見出さないかのように見えるこれら若者の行動は，将来に対する準備期間であるとも言える。この文脈からは「自分探し」という言葉が浮かび上がるが，厳しい社会の現実と「自分探し」を続ける若者の夢を消費しようとする資本の行動は，夢の肥大化とも見なせる。グローバル化の中，若者の目の前に広がる世界はますます広がるばかりで，実は資本の論理からこぼれ落ちたものにさえ，新たな「自分探し」の場が提供されるのが現代社会なのである。

本稿においては，現代社会における若者の逃避行動の延長線上に「自分探し」としてのプロアスリートの出現を位置づけるという仮説構築のため，近年の日本社会の変容とそれに対する若者の変化についての先行研究を概観することによって若者の現実逃避的行動がどのような視座からどのように理解されてきたことを示していく。

1. 近代社会における若者の逃避

1-1. 労働力の製造装置としての学校からの若者の逸脱

社会の本流からこぼれ落ちる若者という現象は今に始まったことではない。近代産業化社会という人間をある種の型にはめる装置そのものが，そこから逸脱する人間を前提にして成立していたと言える。

農耕に従事していた人間を労働者として産業社会に組み入れていった時代を構築した装置として，学校はその最大のものであった。そして産業社会の成熟とともに産業の中心が製造業からサービス業に移行していくにつれ，学校教育もホワイトカラー就労者の育成を射程に置くようになった。この過程で浸透した民主主義は「がんばれば万人に対して平等にチャンスが与えられる」ことを前提にし，自己実現を究極の目標に置いた。しかし，ホワイトカラーとしての雇用が労働者全員に与えられていたわけではないという現実の下では，学校教育に反抗する若者が出現するのはある意味必然であった。すでに1970年代の英国では，学校文化に反抗し，労働市場に出た後も数年で仕事を辞める若者が出現していた。また，この時期すでに学歴による社会上昇を拒否し，スポーツ競技を職にして自己を確立しようとする生徒の存在も確認されている（Willis, 1977：熊沢・山田　訳, 1996）。ここからは，近代社会の成熟の中，構造的に作り出される現実社会からの逸脱や逃避，さらにはそのひとつとして産業社会における雇用 - 非雇用という関係性からの脱出の手段としてのスポーツが浮かび上がる。

1-2. 高度成長の終焉以降の日本の若者の変容

我が国においても，高度経済成長を経て産業社会が成熟する中，若者の意識のあり方が変化し始めたことが指摘されている。成田は，日本の若者の変容を論ずる中で，過去からの一貫性や正当性を重視した伝統志向型，内部志向型（Riesman, 1956：加藤　訳, 1964）などの人の類型の枠組みが，1960年代の終りから70年代にかけて変化したことを指摘する。権威的序列から解き放たれ個を重視する「カプセル型」の自我や，「軽い自我」を持つようになった若者は，1980年代になると，戦後日本が築いた「当たり前の家庭生活」への抵抗を見せるようになった（成田，1986）。ここからは，学校教育から雇用，そして家庭の形成という産業化社会における人のあり方からの解放への志向が，近代社会の行き着く先に見えてくることが示唆される。以下では，この延長線上に位置づけられる若者の逃避の様々なかたちを概観する。

1-2-1. バックパッカー～「自分探し」の始まり

旅という人の営みは，前近代においては多くの場合，生活の必要性からなされたものであったが，近代以降娯楽へと変貌を遂げた。そこに展開されるのは，日頃の労働から解放された非日常の世界である。この非日常性を増幅する装置が遠隔地への渡航による異国体験であった。近代を迎え，海外渡航が可能になると，特権階級の間で外遊ブームがおこり，日本人の渡航範囲は拡大した。この近代黎明期の「何でも見よう」という精神は，その後の若者に受け継がれた（佐々木, 2003）。

第二次大戦での敗戦後，一時海外渡航には制限が加えられたが，その後の観光目的の海外旅行の自由化（1964）と外貨持出し制限の廃止（1967）は富裕層を中心とする日本人の海外渡航を活発化させた。そして，高度成長の恩恵が庶民にまで及ぶようになると，海外旅行は富裕層の物見遊山から若者体験の場へと変貌した。その流れの中，1970年代から80年代にかけて「コジキ旅行」による世界体験や途上国での体験が活字化され，海外旅行向けのガイドブックも出版されるようになると，若者層の海外渡航は激増した（佐々木, 2003前出；有本, 2006）。そして，海外旅行に梅干を持参するような，どこに行こうとも「日本」を持ち込もうとするそれまでの団体パック旅行に対して，多少の危険は顧みず，現地に入り込んで生活体験しようとする「バックパッカー」という新たな旅行者像が構築されるようになった。

彼らの中からは，学校を休学もしくは退学，

あるいは仕事を辞めて数か月以上にわたる海外放浪をする者も出現した。そんな彼らの旅行観の根底には海外の名所旧跡を巡る物見遊山的なものよりも，旅を通した自己の拡充に賭けるという意識が強く横たわっていた（斎藤, 2003）。このようなバックパッカーのイメージは，90年代になるとテレビなどのメディアを通じて人々の間に定着した。また，マニュアル本によって商品化されたバックパッキングという旅は，この時期に出現した格安航空券と相まって，資金が少なくても高度な語学力がなくてもできる手軽な旅と化した。

こうして容易になった異国への冒険は，若者たちにとって，海外に行けば可能性が広がる，新たな自分が発見できるという夢の肥大化へとつながったのである。「自分らしさ」への渇望の中，若者はバックパッカーとして世界を放浪することに自己のアイデンティティの拠り所を求めるようになった（大野, 2007）。その一方で，彼らは一人旅をしながらも異国に「日本人宿」という自己を受け入れてくれる新たな社会空間を形成するようになったが（藤村, 2004），2000年代以降，社会の本流からこぼれおちた若者の多くが，このバックパッカーという新たな想像上の社会空間に逃避の場を求めるようになった[1)]。

このようなバックパッカー像から見えてくるのは，既存の社会の枠組みにとらわれず，したいことを自分らしくするという姿勢である。一方でそれはまだ自分が未だ発見していない（と本人が感じている）「自分らしさ」を探す旅でもある。彼らが探す「自分らしさ」とは，自己愛に満ちた自己の姿であり，その価値観を共有できる者だけが集う「日本人宿」という新たな想像の社会に彼らは身を置き続けることになる。

1）作家の雨宮は，ドロップアウトした自身の体験を踏まえて，ワーキングプアやニートなど新自由主義経済の下発生した「不安定さを強いられる人」を「プレカリアート」の語で示した。社会からこぼれ落ちた彼らは，音楽，カルト宗教，右翼活動などに没頭することによって自らのアイデンティティを確認するのであるが，彼らの逃避の場として雨宮は「旅」を挙げている（雨宮, 2007, p304, p311）

1-2-2. パラサイト・シングルの出現

若者の自分重視の姿勢は，婚姻のあり方にも大きな影響を及ぼした。就職後も両親と暮らす独身者である「パラサイト・シングル」の姿から浮かび上がるのも既存の社会の論理から外れることを許容するバックパッカー同様の「自分らしさ」重視の姿勢である。この現象は「好きなことを追求できることと，嫌なことをどれだけしないで済むか」という点での満足度を満たす環境の追及の帰結であり，彼らが両親に経済的に依存せねばならない理由となっている自分にあった職を目指して頑張っている過渡的状態としての非正規雇用への従事や無業状態も，苦労の伴う面白くない仕事には就かないという自分重視の姿勢の裏返しである（山田, 2000）。この「他者からよく思われる」ことに対する欲求，つまり就業に際しての「他人からよく思われる仕事」と等価の「自分の好きな仕事」や「やりがいのある仕事」へのこだわりは，若者の就業形態にも大きな影響を及ぼすことになる。

1-3. 若者の労働からの逃避

1-3-1. フリーター～就業の新たなかたちの模索

バックパッカーやパラサイト・シングルが増加した1990年代に時を同じくして急増したのがフリーターである。数か月以上の長期に亘って世界中を「冒険」する若者の多くもまたフリーターであり，日本での短期雇用で貯金をした後，世界中を旅するという生活パターンを繰り返している。

フリーターとは，不安定雇用に自ら身を置く若者を指す用語で，1980年代後半に出現したとされる。初め「フリーアルバイター」と呼ばれたこの言葉は，1990年代初めまでは，若者が目

標の実現のため組織に縛られない生き方を選んだ新たな労働のかたちとして肯定的に捉えられていた。その後90年代以降の非正規雇用の増大に伴い，学卒後，正社員になれない若者が出現するに及んで，その定義も，多くの場合自らをフリーターとは認識していない正社員でないフルタイム労働者を除外し，短期間の失業状態におかれた一時的なアルバイトの空白期間を経験している者を含んだ「15～34歳で学生でも主婦でもない人のうち，パートタイマーやアルバイトという名称で雇用されているか，無業でそうした形態で就業したい者」という新たなものに変わった（小杉, 2003；上西, 2002）。

その総数は，1980年代前半には約60万人であったものが，2000年代初めまでに200万人台（堀, 2007）ないし400万人台（玄田・曲沼, 2006；岩間, 2010）へと急増した。この不安定雇用従事者の急増に対し社会の言説も変化した。パラサイト・シングル論とも連動した「労働の趣味化」,「ぜいたくな失業」などという若者の気軽な生き方という言説は，否定的なものに転じ，その原因が若者の「甘え」といった内面的なものにも求められるようになった（本田, 2005）。その後, その要因の分析が進むに及んで, 離職, 離学による「モラトリアム型」, 芸能, 職人, フリーランス職志向のための一時的な選択としての「夢追求型」，正規就業への失敗や個人的トラブルによる一時的選択としての「やむをえず型」にこれを分類することが主流となった（小杉, 2003前出；本田, 2005前出）。

このうちの「夢追求型」が一時的な低賃金労働に身を置く根拠となる「夢」のひとつがプロスポーツ選手である。「やりたいこと」へのこだわりが強く，安定や高収入よりも「いろいろな職を経験したい」,「自分に合わない仕事はしたくない」,「有名になりたい」という意識が強い彼らの欲求をこの職は十分に満たしてくれる。

「夢追求型」フリーターの一部は，自身の目標に向かって着実な歩みを見せる。しかし，彼らの多くは「夢」実現への可能性にやがて疑問を感じ，現実的な方向転換を志向するようになる。この二者はそれなりに現実的な歩みを示すのだが，実現に向かっての方向性を見出せず，立ち止まってしまった者は,「夢」の追及自体を社会からの逃避の言い訳とし,「夢」を追うという「カッコイイ」行為を続ける自分に自己満足し続けるという状態に陥る（小杉, 2003前出）[2]。彼らの「夢」を紐解いていけば，その多くが実現の可能性が極めて低いものが多い。「夢追求型」フリーターの多くが学生時代に将来の進路について具体的な方向性を持っていないことは，彼らが自己の将来像を具体化できないため，実現困難な「夢」を持ち出し, バックパッカーや海外へのワーキング・ホリデー体験のごとく「自分探し」を続けていることが示している（堀, 2006）。

1-3-2. ニート～労働からの逃避

労働に自分探しの場を求めるフリーターが社会問題として語られるようになった2000年代に入ると，労働そのものから逃避する若者にも注目が集まるようになった。ニートとは，‘Not in education, employment or training’の略で，それが使用され初めた英国においては学齢期に属する若年層の失業者を示す用語であった（玄田他, 2006前出）。日本においては2003年ごろから使用され始め次第に流布していったが（本田・内藤・後藤, 2006），若者をめぐる雇用の不安定や初期のフリーターの高齢化によるアルバイト労働市場からの締め出しという社会的背景を反映して，その対象は30代半ばにまでに拡大されている[3]。

2）上西（2002前出）も，芸能関係の仕事を目指すようなフリーターとしての職と夢とが乖離しているタイプにとって，フリーター期間は職業生活への移行期間としては機能しにくいことを指摘している。

3）玄田他（2006前出, p52-54）は，その総数について25歳未満で40万人以上としている。

労働に従事していないという点で，ニートはフリーターとは大きく異なるとも解釈できるが，両者の意識には類似性が窺える。「自分を好きにさせていたい」，「自分が納得したい」という彼らが働かない理由からは，彼らの自己の意識重視の姿勢が浮かび上がってくる。これに加えて彼らに多い自己に対する過大評価（玄田他, 2006 前出）は，「夢追求型」フリーターとの類似性が強い。

また，収入が無いことへの切迫感のなさ，無職であることに対する抵抗感のなさからはパラサイト・シングルの意識との類似性が読み取れる。表出する行動は違えども，ニートもまたフリーターやパラサイト・シングルと同様，社会からの逃避の一形態である。

そのためニートの意識を問題視する論調が浮かび上がるが，その一方，その社会的背景の分析も進んでいる。本田は無業者を，職を求める失業者である「求職型」，働きたいという希望はあるが具体的な求職行動はしない「非求職型」，働きたいという希望も持っていない「非希望型」に分類し，ニートとは後二者の無業者のことを指すものであるとした。そして「働きたくないニート」である「非希望型」は，古来人間社会には一定数存在したものであり，近年社会問題として顕在化してきたのは「働きたいニート」である「非求職型」であり，「やむをえず型」のフリーターと近接した概念とも言える。この増加は，若者自身の意識よりも雇用情勢の悪化がその主要因であるとしている（本田他, 2006 前出）。努力が報われない社会に対して若者たちの中からは，やがて現実社会からの完全撤退というべき行動に走る者も出てきた。それが「ひきこもり」である（山田, 2007c 前出）[4)]。

4）井出（2007）は，フリーター，ニート，ひきこもりを現実社会からの逸脱という点において近接概念だとしている。

2. 若者の変容の背景

1990 年代以降の若者のライフスタイルの変容についての議論の潮流は，当初は，それらが豊かな社会におこった自分中心の若者の贅沢な行動であるというものであった。その後，2000 年代に入って若者の労働からの逃避が社会問題としてとらえられるようになるにつれ，その原因を若者の意識の問題よりもグローバル経済に飲み込まれた日本企業を取り巻く環境の変化やそれに伴う労働市場の縮小など社会的背景に着目点が移っていった。

山田（2000 前出）は，パラサイト・シングル論を展開した当初，生活のために仕事をするのではなく，「自分にあった職」「プライドを保てる職」にこだわって就職をしない，もしくは仕事を辞める現代日本の若者の無業状態を，贅沢な現象だとみなした。

これに対し玄田（2005 前出）は，パラサイト・シングルを取り巻く社会状況を，高度成長期に終身雇用・年功序列型賃金を前提に安定雇用された中高年に，不安定雇用にさらされている若者がパラサイトしている状態であると読み解き，山田の言う「贅沢なパラサイト」論を批判した。その後，山田（2004）もパラサイト・シングルの出現の背景に不安定雇用の増加があることを認め，さらには正社員の若者の間にも将来の安定，収入増を見込めないという意識が拡大しつつあることを指摘した。その上で，将来設計が描きにくい不安定な社会の中，パラサイト・シングルが質的変容を遂げ，1990 年代の「リッチなパラサイト・シングル像」が崩壊しつつあるとした。

これらを踏まえた上で，若者の社会からの逃避現象を日本における社会背景の追及によって解読することが試みられた（原・山内, 2009；玄田他, 2006 前出；岩間, 2010 前出）。その結果得られた社会背景は，1. いわゆる「ゆとり教育」

による一部の子どもの学力低下と学力の二極化に伴う若者の意欲の二極化，あるいは日本における適切なキャリア教育の不足を指摘する学校教育説（本田, 2005 前出），2. 少子化, 核家族化, 地域コミュニティの崩壊などから貧困層子弟が早くからのアルバイトを経験せざるをえなくなり，そのまま正規雇用のレールに乗らなくなるという家庭環境説（小杉, 2006），3. バブル崩壊により非正規雇用が増加したことが不安定・非正規雇用を生み，それが若者の逸脱行動として表象化するという労働市場説（上西, 2002 前出）に大別できる。以下では，教育と経済的な背景について，若者の変容に関わる要因を考察していく。

2-1. 学校教育説

2-1-1. 学校教育の潮流の変化

岩間（2010 前出）は，バブル崩壊後に学卒期を迎え,「就職氷河期」に労働市場に放出された「ロストジェネレーション」について，彼らの義務教育修了時期に「なんでもいいから自分なりの夢を持ちつづけることが大切」という社会的メッセージが増加していたことを指摘している。

1990 年代以降の教育改革においては，それまでの知識重視の教育への反省から，個性化，自由化に主眼を置いた教育改革が実行された。その結果，押し付けや強制はだめだ，やる気が出てくるまで待つ，という教育のかたちが理想とされる空気が教育現場に漂った。その結果，生徒の間に意欲を持つ者と持たざる者，努力を続ける者と続けない者，自ら学ぶものと学びから降りる者との二極分化が進行し,「思わざる結果」として「インセンティブ・ディバイド（誘因・意欲の格差拡大）」が発生し，学びから降りた者を自己満足，自己肯定へと誘うメカニズムが形成されることになった（苅谷, 2001）。

1990 年代後半になると，特に高校段階において, 学校文化になじまない生徒が担っていた「脱生徒役割」に対しての教師の指導が「問題視型」指導から「許容型」指導へ移行したことによって，学校生活からはみ出しているが覇気のある生徒，校則に違反することがあるが生活力の旺盛な生徒，自分で納得のいかない校則には従わない生徒を，本来それらを矯正すべき教師が問題視しなくなるようになった。その結果，進路指導においても，生徒の選択を優先し，夢や希望を捨てさせない希望・自己選択重視の指導がなされるようになり，生徒が自分で選択したことに教員が反対できない傾向が強くなった。このような進路指導の下では，生徒にとっては，何か目標があれば「フリーター」「進路未定」という選択が正当化されることになり，個性重視の原則の下で「自分探しの旅」を肯定化するという，生徒の進路決定への関与から教師が撤退する傾向を生んだ（堀, 2002；矢島・耳塚, 2005）。親の側でもこの時期「わが子には好きなことをしてもらいたい」という願望が強くなり，家庭においても子どもの進路に対してアドバイスが欠如するようになった（本田, 2005 前出；原他, 2009 前出）。

このような教育を取り巻く環境の変化は,「やりたいこと」を優先して若者が職業に対する選択の先延ばしを可能にする状況を生み，学卒直後の採用を前提にしている正規雇用の道から若者を遠ざけることになった（下村, 2002）。その結果,「使い捨て」労働から先の進路を見つけられなくなった若者の中には将来の希望を失い，社会から逃避する者，あるいは先の見えない将来から目を背けるためにひたすら実現不可能な「夢」を追い続ける者が出現した（山田, 2007c 前出）

2-1-2：学校経由の就職というモデルの崩壊

以上のような教育の潮流の変化とその結果としての若者の正規雇用からの逸脱，社会からの逃避という文脈からは，学校経由の就職という

それまでの日本社会の特徴だった教育から職業へスムーズな移行が変化してきたことが読み取れる（本田, 2005 前出）。この背景には教育そのものの変化よりむしろ，社会の変化があると考えられる。

かつて「野郎ども」が学校文化になじまなかったのは，学校教育が産業社会における労働の理想像にホワイトカラーを据えて行われていたのにもかかわらず，全ての労働者が実際にはホワイトカラーとして就労するわけではないという矛盾を抱えていたからであった（Willis, 1977：熊沢他　訳, 1996 前出）。現代社会おいては，バブル崩壊後の不況だけでなく団塊世代の終身雇用，年功序列型賃金を前提とした労働市場での滞留や女性の社会進出，それにサービス経済化と生産サイクルの短期化による労働力の量的柔軟化，グローバル経済の進展による人件費削減の圧力の結果としての非正規雇用の増大という景気とは関係ない構造的変化が若者の雇用に影響することになった（本田他, 2006 前出）。その結果，学校教育から就職という移行がうまく機能しなくなり，学校の生徒指導，学習指導，進路指導も厳しいものではなくなることになった。生徒の将来に影響を及ぼすものではなくなった学校の指導は，学校教育を取り巻く環境を「ハマータウン化」させた。1990 年代の「ゆとり教育」は，グローバル経済の伸長によるホワイトカラー正規雇用の労働市場の縮小の結果としての日本特有の学卒後の正規雇用という道筋の崩壊と同時進行で実施されたものと言える。

2-2. グローバル経済の進展と雇用形態の変化

若者をめぐる雇用情勢の変化の主要因は，産業社会の成熟やグローバル経済の進展に求めることができる。戦後，日本が復興の過程で築きあげた「総中流社会」は，産業化の成熟によって現実には1970年代末から85年までには終わっていた（岩間, 2010 前出）。それに対するオルタナティブを社会が構築できなかったことが，雇用不安を呼び，ひいては若者の行動に変容をもたらした（野村, 1998）。この文脈からはグローバル巨大資本のもとに人々が従属する〈帝国〉論（Hardt & Negri, 2001：水島・酒井・浜　訳, 2003）や，テクノロジーの進歩によって無国籍化した巨大資本の展開の結果としてのアウトソーシング，オフショアリング，ホームソーシングなど労働力のフレキシブルな移動が可能になる「フラット化」（Friedman, 2006：伏見　訳, 2006），それらの変容の所産としての人々の価値観の急激な多様化である「リキッド・モダニティ」（Bauman, 2000：森田　訳, 2001）など産業化社会のモデルが崩壊したポスト・モダンの世界が見えてくる。

グローバル化の下，国際競争にさらされた日本企業は，1990 年代に非正規雇用の拡大を推し進めた。この企業戦略の下では，被雇用者は基幹労働者としての正規雇用労働者と周辺労働者としての非正規雇用労働者に二分された。それまでの被雇用者は正規雇用が前提となっていたので，それ以後増加した非正規労働者は若年層が中心となった（白井・下村・川崎・若松・安達, 2009）。つまり，若者の正規雇用からの逸脱やその延長線上にある社会からの逃避行動は，若者意識の変化から生じたものではなく就業機会の減少という環境の変化によるものだと言える（玄田, 2005 前出；白井, 2009）。

しかし，若者を取り巻く雇用情勢の変化は，日本だけに限らず，先進国が共通して抱える問題である。正規雇用の縮小や業務のマニュアル化によるキャリアに無関係な「マックジョブ」の増加（Tannock, 2001：大石　訳, 2006）やグローバル経済の進展による労働者の移動の活発に伴う一部の「能力発揮ディアスポラ」と圧倒的多数の「新しい奴隷」としての非熟練「プロレタリア・ディアスポラ」の二極化（Cohen, 1997：駒井　訳, 2001）と言った現象は地球全体が抱え

る問題である。このこともまた，教育の変容とともに若者の逃避行動の要因として分析されるべきものである。

3. ポスト・モダンにおける若者の変容

1990年代以降，産業社会における人々の労働に対するアプローチは変容しつつある。山田はこの変容を「1998年問題」とし，社会全体が1990年代後半に急激な変化を見せたことを示した。この年前後に起こった「できちゃった婚」，ひきこもり，不登校や家で全く勉強しない子どもの急増は，単なる経済不況が原因ではない。グローバル化の進展による社会の構造的変化が「未来の不確実化」を生み，不安定雇用に従事するものだけではなく，正規雇用のレールに乗った者の中にも将来の生活の安定，収入増を見込めないという意識が拡大したことが，人々の社会からの逸脱行動を助長させた。特に若者においてこの傾向は顕著で，産業化の成熟期を過ごした彼らの親世代が「夢」として抱き，そして現実に手にした個室付きのマイホームに代表される「豊かな」生活を当たり前のものとして育った彼らは，希望を見いだせない自らをとりまく状況に現実的な目標としての「夢」を見ることができなくなった（山田, 2004前出）。

このような社会においては，かつて「総中流」と呼ばれた人々が共通に抱いていた「夢」も変容し，若年層の意識も多様化した。そして雇用区分が多様化した結果，正規労働者は仕事中心の生活を送らざるをえなくなる一方，非正規雇用のラインに流れた者は経済的自立が不可能になるというライフプランの二者択一の強要が見られるようになった（白井, 2009前出）。このような環境においては，社会的責任を回避しフリーターなどの不安定就業の道や失業状態に自ら身を投ずる若者や（小杉, 2003前出；原他, 2009前出），日本に希望を見出せず，労働の場を海外に見出す若者（小林, 2008）も出現する。音楽や芸能などの文化的職業での自己実現という「夢」を追いかけて海を渡る「文化移民」（藤田, 2008）の出現は，このような社会変容の結果若者たちの意識の中に生じた「自分探し」の個人化・脱社会化（熊沢, 2006）が表象化したものである。

4. 逃避のかたちの変容

グローバル経済進展の結果としての先進国の雇用情勢の変化やそれに伴う教育の変化は，学卒直後の正規雇用での就業，そして結婚，次世代の生産の場としての家庭の構築という近代産業社会の人のライフサイクルの理想像からの様々なかたちでの逸脱，逃避を生んだ。そして現在において，この逸脱，逃避の形が変容している。

男性の「非求職型ニート」が就業への志向を見せない理由として「資格取得準備中」，「芸能・芸術関連のプロを目指して準備中」などの将来のキャリアを念頭においた上での活動への従事が指摘されている（本田他, 2006前出）。これは，就業と不就業の違いこそあれ，先述の「夢追求型」フリーターと類似の逃避行動である。彼らの多くは，「夢」に向けて行動しているように周囲から見える自分に対する自己満足感から抜け出せないでいる。グローバル化した世界は，人々に実現不可能な「夢」を現実のものであるかのように見せるようになるが，この結果，従来逸脱や逃避とは無縁のものと思われていた場が若者の逃避の場と化している。

4-1. 大学院～高学歴フリーターの貯水池

産業化の成熟した先進国の社会の多くは，少子化という問題に直面した。とりわけ日本においてこの傾向は顕著で，教育機関はその段階を問わず，学生・生徒の募集の困難に直面している。1990年代に入って18歳人口の減少などに

伴う高等教育への進学者の頭打ち状態に対して大学がとったのは研究者養成機関である大学院の拡充であった。同時期に起こった若年労働市場の縮小は，就職難で職にあぶれた大卒者を大学院へ誘導する役割を果たしたが，その一方で学位取得者を教員として吸収すべき大学は少子化の進展の中拡充は望めず，その結果，フリーター予備軍としての高学歴者を大量に生むことになった（山田, 2007c 前出；水月, 2007）。

ここからは，とりあえず就職を先延ばしにするモラトリアム期間の延長としての高学歴化が浮かんでくる。実際，卒業を控えた大学生の選択肢には，求職活動や留学，そして大学院進学と並んでフリーターが挙がっている（小杉, 2003 前出）。前述の若者の雇用を巡る状況の悪化や，社会や家庭の「やりたいこと重視」の教育方針を考えると，求職活動以外の選択肢は一種の逃避行動と捉えることもできる。そして，留学や大学院進学は, フリーターよりもその将来に「夢」を抱ける可能性が高いという点で，周囲からも承認されやすいものである。

4-2.「希望難民」～逃避の場としての NGO, 海外体験

すでに述べたように，高度成長後の消費社会の成熟，都市化に伴う核家族化，少子化，地域コミュニティの希薄化により，日本社会は幸福感の多様化の時代を迎え，それに伴って人々の生きる方向性は変化した。特に物的に恵まれた環境に生まれ育った現代の若者は，際限のない充実感の希求，自己実現への傾向を強め，職業を生きていくためではなく「自分探し」のツールとして利用するようになった（岩間, 2010 前出）。

古市（2010）は，国際 NGO でのボランティア活動がそのような若者の「自分探し」の場として機能していることを指摘している。「平和の船」に乗っての地球一周クルーズによる世界じゅうの人々との交流という旅の参加者である若者たちの内，少なからぬ者は，低賃金，長時間労働の専従ボランティアや，「ボランティア・スタッフ」として，このパッケージ化された旅行商品の販売に従事している。また乗客としての参加に留まった者の多くは，学生やフリーター，あるいは過酷な長時間労働と低賃金の下に置かれていた「周辺的正社員」である。数か月に及ぶクルーズに参加するこのような若者は，本質的には「不安定層」（本田他, 2006 前出）に属するものである。「地球一周」を謳ってはいるが，参加者が実際に異国体験をするのは，停泊地でのオプショナル・ツアーだけであり，クルーズの日程の大半を占める船中では，左派の主催団体による「平和」に通じる企画やそれに触発された参加者による催し物が実施される。ここでは，「地球一周」という言葉から想起されるかつてパックパッカーが求めた異国体験のイメージはない。ただ, バックパッカーたちが集うコミュニティである「日本人宿」が，出国時点から彼らとともに移動していると考えれば，両者に共通する退屈な日常からの逃避行動としての長期に渡る異国への旅という構図が浮かんでくる。

純粋な観光目的で参加した乗客以外のこのような若者の乗客の参加動機は曖昧で，「とにかく地球一周をしたかった」ということに集約される。世界地理や世界情勢，政治経済に関する知識がほとんどない彼らにとっては，訪問地や船内での「平和活動」も，実際は関心事ではない。地球一周しながらの「世界平和」に向けた活動という，社会の本流に入った正規雇用の若者にはできない「何かすごいこと」をしながら，「いろんな人」と出会い，「楽しく」，「自分の成長」を感じることができる国際 NGO 活動への参加は，肥大化した自己実現のツールと化する。クルーズ終了後，クルーズの中で自分の居場所を見つけた者は，クルーズ中の人間関係を維持しながら再び非正規雇用市場に吸収されていく。

一方で「自分探し」の終着点を発見できなかった者も非正規雇用に一時従事することになるが，必要な費用を貯めると，ワーキング・ホリデーや語学留学によって「自分探し」を継続する（古市, 2010 前出）。

彼ら「希望難民」から見えてくるのは，ニートやひきこもりとは対極にある社会の本流から外れた若者たちの外向きの逃避行動である。かつて逃避の場を海外に求めたバックパッカーには「何でも見てやろう」というある意味前向きな姿勢があり，彼らは一時的な逃避を体験した後は，彼らに椅子を用意してくれていた正規雇用を前提とした労働市場に吸収されていった。同じように海外へ逃避を行う現在の「希望難民」達には，そのような椅子は用意されていない。しかし，不透明な未来しか見えない彼らにとって, NGO やボランティアなどの海外での活動は，大学院同様，非正規雇用労働や無職という身分にある種のステイタスと希望を与えてくれるものである。

4-3. 逃避の場としてのスポーツ

以上のような文脈からは，現在若者の逃避の形態が変化していることが読み取れる。その延長線上に浮かんでくるのが新たな若者の逃避のかたちとしてスポーツである。

パラサイト・シングルの女性がこだわる「自分の好きな仕事」,「やりがいのある仕事」は，実際は「他人からよく思われる仕事」であることが多く（山田, 2000 前出），同じ傾向はフリーターにもみられる。「夢追求型」フリーターの抱く「夢」については，女性より男性の方が，実現可能性に乏しいことも指摘されているが（小杉, 2003 前出），これは先述の雇用情勢の悪化やそれに伴う教育の変化の結果，夢追求の傾向が，男性により強くなってきていると捉えることができる。「玉の輿」の結婚という人生の変革をもたらす可能性を持っている女性に対し，それを持たない男性が「夢」として抱くのがプロスポーツ選手という，成功者には巨万の富がもたらされる職業であることは十分に納得できる。

1990 年代以降の「やりたいこと重視」の教育は，その後の社会風潮に影響をもたらした。自らの体験から，既存の学卒から正規雇用へという社会のレールを「昭和的価値観」とみなし，そこからの脱却を志向する「したいことに全力でぶつかる生き方」を肯定する言説はその一例である（城, 2008）。しかし，ここで例に挙げられる大学アメリカンフットボール部から大企業に就職しながらもプロ選手という「夢」を追いかけ，欧州にある北米プロリーグ NFL の下部リーグに身を投じ，その後，日本でクラブチームコーチ，トレーナー養成学校講師として活躍している人物の経験は，誰もがまねできるものではない。

正規雇用を経てマイホーム購入というかつての普通の日本人が抱いた「夢」が，多くの若者にとって実現不可能なものになった現在，社会の本流からこぼれたがゆえにより大きな「夢」を見ることによって自己を保存せざるをえない若者にとって，このような言説は，夢の肥大化の種になる。

松岡（2008）は，スペクテイター・スポーツを現実社会からのつかの間の逃避の手段であるとしている。プロスポーツの世界で現在トップリーグによる地球規模での系列化，人材獲得網の拡大が進行している中，トップリーグを頂点とする世界規模でのネットワークの周縁においては，人材供給地，育成地としての競技レベルを落としたプロリーグが出現している。この結果,「するスポーツ」と「観るスポーツ」の境界の溶解が起こり,「するスポーツ」においても逃避が可能になっている。その新たにできた逃避の場は，産業化が行き着いた社会の中で本流からこぼれ落ちた若者を吸収している。例えば野球の場合で言えば，それは途上国や野球の普及

の進んでいない国々の新興プロリーグや北米や日本に1990年代以降誕生している独立リーグとなって現れている。

グローバル化の進展によって世界各国へのアクセスが容易になった現在において，スポーツ先進国でトップアスリートとなれなかった若者が，当該スポーツにおける後進国のプロリーグやプロスポーツの裾野の広い国で，スポーツによる低賃金労働に従事することは決して難しいことではない。イスラエルプロ野球に先進国から参加した選手たちはまさにその一例である。このリーグに参加した27歳の日本人青年は，高校野球を途中退部し，一浪して入った大学では野球部に所属せずクラブチームでプレーしていた。このような経歴の持ち主がプロ野球選手になれるということは通常では考えられない。大学在学中にも就職活動をせず，イスラエルにプロ野球選手として渡航する前は非正規雇用に従事していたことは，彼が「夢追求型」のフリーターの典型であったことを物語っている。そして，イスラエル渡航の動機を「このまま「夢」をあきらめたら，何をやっても中途半端に終わるから」とするその姿は，プロスポーツの場が若者にとっての「自分探し」の場に変容していることが窺える（石原, 2010c 前出）。

このような例は決して特殊な例ではない，メキシコシティの「日本人宿」に長期滞在するプロレス修行に来た若者や隣国グアテマラでプロサッカー選手になるべく宿の屋上で日々サッカーボールを蹴る若者の姿は[5]，現在において「するスポーツ」が若者の社会からの様々な逃避行動と同類のものと化していることを示している。

同様の例は国境を越えずとも見ることができる。日本の独立プロ野球リーグに身を投ずる若者のうち少なからぬ者が，現実には自分が日本のプロ野球や北米メジャーリーグなど上級のプロリーグと契約できることはないと知りながら，「ただ野球がしたい」という理由で不安定雇用の「プロ野球」に身を投じている[6]。彼らにとって働きながらのクラブチームでの野球は「すごいこと」でもなんでもない。ましてや「働く」と言っても，安定した正規雇用は狭き門となっている。それならば，プロ野球選手という「夢」を追った方が余程格好がいい。彼らの姿は「夢追求型」フリーターそのものである。低賃金・不安定雇用としての独立プロ野球リーグという就職先は，若者にとっては大学院，NGO と同様の「格好のいい」進路と化している。そしてそれは「他人からよく思われる仕事」として彼らの中で合理化される。このような現象は，近代社会の成熟の結果としての「希望格差」（山田, 2007c 前出）の副産物であるといえる。

おわりに

本稿は，スポーツ労働移民の枠組みの変容を産業化の行き着いた先進国，とりわけ日本の若者に見られる社会からの逃避行動の文脈に乗せることを試みるべく先行研究を概観したものである。「バケーション型」，「自分探し型」（石原, 2010c 前出）のアスリートの出現によって崩れたエリート・アスリートとしてのプロアスリート像からは，産業化と共に発生し，伝統スポーツの参加者から観客とプレーヤーを分化させ，プレーヤーの職業選手化という道のりを歩んできた近代スポーツという文化事象が，近代の終焉とともにその枠組みの変容を遂げていることがうかがえる。

本稿においてはまた，これら新たなプロアスリートの出現の要因を探ったが，この「やりたいこと重視」のキャリア設計の原因は，雇用者

5）メキシコシティの「日本人宿」での観察，インタビュー（2006.8.8–8.10）

6）独立野球リーグ，ジャパン・フューチャーズ・ベースボール・リーグの練習生へのインタビュー（2010.10.4，大阪市住之江公園野球場）

側あるいは社会の問題と，教育の変化に伴う本人側の未熟な考え，消極的な意識が複合したものに求められると言える（若松, 2009)。この現象をどうとらえていくかは，筆者の今後の課題でもあるのだが，本稿を終えるに当たって，現在においての筆者の見解と問題提起，そしてその展望をしておく。

資本主義の成熟に伴う先進国における社会構造の変化は，若者の社会への関わりに大きな変化をもたらした。雇用情勢の悪化は教育の変化を生み，結果として若者の労働，あるいは社会そのものからの逃避となって現れている。このことは，スポーツの世界においても，国際移動するプロアスリートの枠組みの変容となって現れている。地球規模でのプロスポーツ資本のネットワーク拡大の中，人材供給地，育成地としての役割を担う底辺のプロリーグに集う選手の多くは, 従来想定されていたようなトップアスリートなどではなく，フリーター，バックパッカーなどと本質的に変わることのない先進国出身の若者である。

昨今,「夢」という言葉が巷間満ちあふれ,「夢」に向かって進む若者を礼賛する言説が飛び交っている。しかし，その「夢」の多くは，将来の展望が見えないゆえの逃避先になっている。本稿で示した若者の様々な逃避行動と新たなかたちのプロアスリートの出現は，実体のない「夢」による新たな搾取の構造さえ予感させる。正規雇用のという社会の本流からこぼれた若者は「夢」を見ることによって将来の不安をかき消さざるをえない状況に追い込まれている。「自分探し型」のスポーツ労働移民の多くは, 多くの場合, プロスポーツ選手という「夢」のため，報酬以上の金銭を失っている。

山田は，フリーターに身を投ずる若者について,「好きでやっている」という言説ともに，夢の実現，将来の起業を目指すフリーター像も否定し，彼らを「仕事能力もなく，正社員になれないので，しかたなくバイトをして小遣い稼ぎをしている若者たち」としている。実現の可能性が乏しく，仮にプロテストに合格して契約を勝ち取っても，せいぜい期待できるドラフトの下位指名では高額の報酬は期待できず，長期にわたる雇用や引退後の保証もないプロ野球選手を目指してフリーターをしながらバッティングセンターに通う若者や，大学院出の超高学歴フリーター，たとえそれになれても収入の安定しないカタカナ職業を目指すフリーター達の「やりたい仕事」へ拘泥は，かえって将来の不安を増大させている（山田, 2004 前出)。このような状況に対して，社会は「若者の挑戦」という肯定的な視線を送るよりも警鐘を鳴らす必要性があるのではないか[7)]。

フリーターに代表される不安定雇用の不利さは明らかである。低収入の不安定雇用者は，実際には仕事に追われて人生の見通しが立てられない上，スキルアップのための研修の機会も多くの場合雇用者から与えられない。「自分探し」や「夢追求」と称して自ら不安定雇用に身を投じているのだとすれば,「自分らしさ」追求にあけくれ，自己満足する若者は，裏を返せば労働市場や体制にとって都合のいい存在でしかないのである（古市, 2010 前出)。

安定した職業生活への移行との関連の薄い適職信仰, やりたいこと重視の姿勢を理由にフリーターを続けるものは少ないのだが（若松, 2009 前出), それに拘泥する「自分探し型」のアスリートとの類似点の多い「夢追求型」フリーターについてはすでにその離脱成功率の低さが指摘さ

7）山田は，パラサイト・シングルの多くに見られる国内の大学院への進学や海外の大学・大学院への，あるいは語学を目的とした留学，ソムリエなど専門学校への進学，それに司法試験・会計士試験などの受験について, これらを創造的で「自分にあった」仕事を目指そうとする，現在の生活に飽き足りないパラサイト・シングルの「希望」の受け皿であるとし，現実には就職先が限られ，競争も激しい「希望」であるとして警鐘を鳴らしている（山田 , 2000)。

れている（堀, 2007）。しかし，大卒者について言えば, 就職に決して有利ではないスポーツキャリア（大竹, 2009）や大学スポーツのトップアスリートのセカンドキャリアの困難さ（清水・高橋・河野, 2010）, さらに「不安定層」,「不活発層」（本田他, 2006 前出）の増大による将来の社会問題の危惧（矢島他, 2005 前出）を考えれば，若者の先の見えない「夢への挑戦」を商品化するような動きには, 警鐘を鳴らすべきである。しかし，このような「挑戦」に誘われざるをえない若者を巡る状況を考えれば，彼らの「挑戦」を将来につなげる方策を模索することも必要であるが，これらの点については，この試論を実証する具体例のさらなる分析と併せて今後の筆者に委ねられた課題であると考えられる。

本稿においては，プロアスリートの枠組みの変容を日本の若者の逃避行動の延長線上に位置付けようと試みるべく先行研究の概観を行った。イスラエルプロ野球で見られた北米や豪州からの「バケーション」型のアスリートの事例や，大卒後どうしてもプロ野球選手になりたくてイスラエル・リーグに参加した米国人の若者が，その後も「夢」を捨てきれず，1 年のフリーター生活の後，たった 1 ヶ月のシーズンで報酬 300 ドルの中国プロ野球に身を投じたという事例は [8], 同様の現象は日本だけでなく他の先進国でも見られる可能性を示しているが，これらについての本格的考究も今後の課題としたい。

引用文献

Agergaard, S.（2008）Elite athletes as migrants in danish women's handball. *International Review of Sociology of Sport, 43*, 5–19.

赤木智弘（2007）「丸山眞男」をひっぱたきたい：31 歳フリーター。希望は，戦争。. 論座，*140*, 52–58.

雨宮処凛（2007）「生き地獄天国：雨宮処凛自伝」. ちくま文庫.

有本尚央（2006）旅人たちの共同体―日本人バックパッカーに関するフィールドワークから―. 龍谷大学大学院研究紀要. *14*, 117–131.

Bale, J.（2004）Three geographies of african footballer migration: Patterns, problems and postcoloniality. Armstrong, G., & Giulianotti, R.（Eds.）*Football in Africa: Conflict Conciliation and Community*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Bauman, Z.（2000）*Liquid Modernity*. Cambridge: Polity Press. 森田典正（訳）（2001）「リキッド・モダニティ：液状化する社会」. 大月書店.

Cohen, R.（1997）*Global Diasporas: An Introduction*. London: UCL Press. 駒井洋（監訳）（2001）「グローバル・ディアスポラ」. 明石書店.

Falcous, M., & Maguire, J.（2005）Globetrotters and local heroes?: Labor migration, basketball, local identities. *Sociology of Sport Journal, 22 (2)*, 137–157.

Friedman, T. L.（2006）*The World is Flat : A Breaf History of the Twenty–First Century*. New York : Farrar, Straus and Giroux. 伏見威蕃（訳）（2006）「フラット化する世界：経済の大転換と人間の未来」. 日本経済新聞社.

藤村正之（2001）現代社会における日常/非日常の構図：高度消費社会への動的スタンス. 嶋根克己・藤村正之（編著）「非日常を生み出す文化装置」. 北樹出版.

藤田結子（2008）「文化移民：越境する日本の若者とメディア」. 新曜社.

古市憲寿（2010）「希望難民ご一行様：ピースボートと「承認の共同体」幻想」. 光文社新書.

玄田有史（2005）「仕事のなかの曖昧な不安：揺れる若年の現在」. 中公文庫.

玄田有史（編著）（2006）「希望学」. 中公新書クラレ.

玄田有史・曲沼美恵（2006）「ニート：フリーターでも失業者でもなく」. 幻冬社文庫.

原清治・山内乾史（2009）「「使い捨てられる若者たち」は格差社会の象徴か―低賃金で働き続ける若者たちの学力と構造―」. ミネルヴァ書房.

Hardt, M., & Negri, A.（2001）*Empire*. Cambridge : Harvard University Press. 水島一憲・酒井隆史・浜邦彦（訳）（2003）「〈帝国〉：グローバル化の世

8）さらに言えば，中国での短いシーズンの後，彼は 2 ヶ月に渡って中国国内を旅し，その後上海でソフトウェア会社のインターンという不安定就業に身を置いた。彼の姿は，フリーターとして働いた後，貯金を使って世界を漫遊するバックパッカーの姿と重なる。

界秩序とマルチチュードの可能性」．以文社．
本田由紀（2005）「若者と仕事：「学校経由の就職」を超えて」．東京大学出版会．
本田由紀・内藤朝雄・後藤和智（2006）「「ニート」って言うな！」．光文社新書．
堀有喜衣（2002）高校生とフリーター．小杉礼子（編）「自由の代償 / フリーター：現代若者の就業意識と行動」．日本労働機構．
堀有喜衣（2006）支援機関としての学校．小杉礼子（編）「フリーターとニート」．勁草書房．
堀有喜衣（編）（2007）「フリーターに滞留する若者たち」．勁草書房．
井出草平（2007）「ひきこもりの社会学」．世界思想社．
石原豊一（2008）ベースボール拡大の諸相―イスラエルプロ野球にみるスポーツ産業のグローバル化―．スポーツ産業学研究，*18 (2)*，21–29.
石原豊一（2010a）プロ野球をめぐるグローバルな相互連関関係＝「ベースボール・レジーム」の構築と拡大についての一考察―2008 年世界プロ野球におけるスポーツ労働移民の分析から―．ベースボーロジー，*11*, 46–78.
石原豊一（2010b）独立野球リーグの現状―企業スポーツからプロリーグへ―．体育の科学，*60 (5)*, 318–322.
石原豊一（2010c）プロスポーツのグローバル化におけるスポーツ労働移民の変容―野球不毛の地イスラエルに集うプロ野球の選手の観察から―．スポーツ社会学研究，*18 (1)*, 59–70.
岩間夏樹（2010）「若者の働く意識はなぜ変わったのか―企業戦士からニートへ―」．ミネルヴァ書房．
城繁幸（2008）「3 年で辞めた若者はどこへ行ったのか―アウトサイダーの時代」．ちくま新書．
苅谷剛彦（2001）「階層化日本と教育危機：不平等生産から意欲格差社会へ」．有信堂．
Klein, A. M.（1989）Baseball as underdevelopment: The political economy of sport in the dominican republic. *Sociology of Sport Journal, 6*, 95–112.
小林美希（2008）「ルポ“正社員”の若者たち―就職氷河期世代を追う」．岩波書店．
小杉礼子（編）（2002）「自由の代償 / フリーター：現代若者の就業意識と行動」．日本労働機構．
小杉礼子（2003）「フリーターという生き方」．勁草書房．
小杉礼子（編）（2006）「フリーターとニート」．勁草書房．
熊沢誠（2006）「若者が働くとき―「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず」．ミネルヴァ書房．
Magee, J., & Sugden, J.（2002）The world at their feet: Professional football and international labor migration. *Journal of Sport and Social Issues, 26 (4)*, 421–437.
Maguire, J., & Stead, D.（1998）Border crossings: soccer labour migration and the european union. *International Review for the Sociology of Sport, 33 (1)*, 59–74.
Maguire, J., & Pearton, R.（2000）Global sport and the migration patterns of France ’98 World Cup finals players: Some preliminary observations. *Soccer and Sociology, 1 (1)*, 175–189.
松岡宏高（2008）スポーツファンを知る：見るスポーツ．原田宗彦（編著）「スポーツ産業論 第 4 版」．杏林書院．
水月昭道（2007）「高学歴ワーキングプア：「フリーター生産工場としての大学院」」．光文社新書．
森岡孝二（2009）「貧困化するホワイトカラー」．ちくま新書．
成田康昭（1986）「「高感度人間」を解読する」．講談社現代新書．
中野麻美（2007）「労働ダンピング：雇用の多様化の果てに」．岩波新書．
野村正實（1998）「雇用不安」．岩波新書．
大野哲也（2007）商品化される「冒険」―アジアにおける日本人バックパッカーの「自分探し」の旅という経験．社会学評論，*58 (3)*, 268–285.
大竹文雄・佐々木勝（2009）スポーツ活動と昇進．日本労働研究雑誌，*587*, 62–89.
Riesman, D.（1956）*The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*. New Haven : Yale University Press. 加藤秀俊（訳）（1964）「孤独な群衆」．みすず書房．
斎藤聖二（2003）バックパッカーになる．青柳まちこ（編）「文化交流学を拓く」．世界思想社．
佐々木冬流（2003）何でも見よう・何でも見てやろう―近代日本のウォーカーたち．青柳まちこ（編）「文化交流学を拓く」．世界思想社．
佐高信・奥原紀晴・若松孝二・福島みずほ・森達也・鎌田慧・斎藤貴男（2007）「「丸山眞男」をひっぱたきたい：31 歳フリーター。希望は，戦争。」への応答．論座，*143*, 83–97.
清水聖志人・高橋義雄・河野一郎（2010）大学運動部の指導・運営内容差異による就職状況の比較―レスリング競技者を対象として―．スポーツ産業学研究，*20 (1)*, 119–129.
下村英雄（2002）フリーターの職業意識とその形成過

程―「やりたいこと」志向の虚実．小杉礼子（編）「自由の代償／フリーター：現代若者の就業意識と行動」．日本労働機構．

白井利明（2009）若年者にとっての雇用区分の多様化と転換―その問題点と課題．日本労働研究雑誌，*586*, 59–67.

白井利明・下村英雄・川崎友嗣・若松養亮・安達智子（2009）「フリーターの心理学：大卒キャリアの自立」．世界思想社．

Tannock, S.（2001）*Youth at Work: The Unionized Fast-food and Grocery Workplace*. Philadelphia: Temple University Press. 大石徹（訳）（2006）「使い捨てられる若者たち：アメリカのフリーターと学生アルバイト」．岩波書店．

上西充子（2002）フリーターという働き方．小杉礼子（編）「自由の代償／フリーター：現代若者の就業意識と行動」．日本労働機構．

若松養亮（2009）フリーターのキャリア移行：どうしたらフリーターから抜け出せるのか．白井利明・下村英雄・川崎友嗣・若松養亮・安達智子（編）「フリーターの心理学：大卒キャリアの自立」．世界思想社．

Willis, P. E.（1977）*Learning to Labour : How Working Class Kids Get Working Class Jobs*. Farnborough: Saxon House. 熊沢誠・山田潤（訳）（1996）「ハマータウンの野郎ども：学校への反抗，労働への順応」．ちくま学芸文庫．

矢島正見・耳塚寛明（編著）（2005）「変わる若者と職業世界：トランジッションの社会学」．学文社．

山田昌弘（2000）「パラサイト・シングルの時代」．ちくま新書．

山田昌弘（2004）「パラサイト社会のゆくえ―データで読み解く日本の家族」．ちくま新書．

山田昌弘（2007a）「少子社会日本：もうひとつの格差のゆくえ」．岩波新書．

山田昌弘（2007b）「格差社会スパイラル：コミュニケーションで二極化する仕事，家族」．大和書房．

山田昌弘（2007c）「希望格差社会：「負け組み」の絶望感が日本を引き裂く」．ちくま文庫．

（2011. 2. 21　受稿）（2011. 5. 16　受理）